

IIIFへの期待：より豊かな 情報資源への協働

国立国会図書館 電子情報部 電子情報流通課

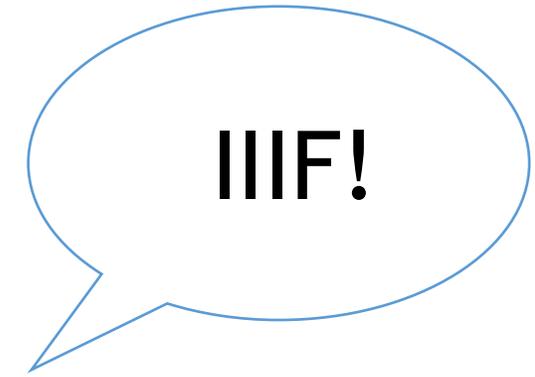
標準化推進係 奥田倫子

2017年7月27日 第4回CODHセミナー

本日の内容

- 1) 人文学研究コミュニティとリポジトリ
- 2) NDLにおけるIIIFの取組み
 - APIの実装
 - 館内認知のポイント
- 3) IIIFへの期待

研究者コミュニティ



研究資源

研究成果



リポジトリ（コンテンツの管理・公開機関）

リポジトリとして検討・・・

1. 自館サービスに IIF API'sを実装するか
2. 「誰に」「何を」「どのように」提供するか（サービスの再設計）
3. 関連ソフトウェアの開発に関与するか



▼ 解題/抄録

▶ 目次・巻号

▶ 書誌情報

サムネイル一覧

先頭

前

次

最終

コマ番号

10

/58

URL

印刷する

フルスクリーン(画面の拡大)

日東魚譜. 巻1-5の解題/抄録

著者仲田玄泉(? - 1746)は江戸の町医師、号は一通子。本書は日本最初の魚類図譜だが、次の4種類があり、それぞれ構成・所収品数・図の出来が異なる。記文はいずれも漢文。1.享保4年(1719)序本、全344品、無彩、図は劣る:当館特1-2524本は、後半の図が欠く。2.享保16年(1731)序本、全312品、無彩、流布しているが、図は劣る:当館には、特1-927本と139-127本があり、前者は魚類のみ彩色。3.享保21年(元文元年、1736)序本、全302品、彩色、図は良好:内閣文庫に、將軍吉宗が一覧した自筆本とその転写本が残るだけである。4.元文6年(寛保元年、1741)序本、338品、彩色、図は良好:本資料のみ知られているが、自筆本ではない。松平定信(白河楽翁)旧蔵。本資料は、冊1が淡水魚・淡水産貝類ほか、冊2が海産魚・ハジ類、冊3が海産魚(ウジフを含む)・「海虫部」(ウミガメ・カニ・コボ・トビなど)・「海中柔魚部」(タコ・イカ・ナマコなど)、冊4が海産貝類(アワビ類・二枚貝・カキ類・巻貝に分ける)、冊5が「異魚」(シュモクザメ・マンボウ・イノゲンチャク・カンオノエボシ[クワゲ]など)。(磯野直秀)

国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp>)

古典籍、図書、憲政資料、官報等の

画像とメタデータ 約53万点

解題・翻刻 約1900件

インターネット公開中



10%

概観図オン

JPEG

Image API!
Presentation API!
Search API!

其類當立者皆曰在也凡魚
尾魚其論予所在則涇海
論其魚則鯉魚為河魚之
又其勝地城州澗川江州
武州漢草川常州義和田
諸州有名產但生于川流
佳哉也生于池中溜水者
也金鱗紫鬚者名呼紫鱗
也肉色水紅味最或也長
之鯉弘景曰山上水中有
鱗愛乃至飛越矣爾雅之釋
或此之以出于卷首



リポジトリとして検討・・・

1. 自館サービスに IIF API'sを実装するか

2. 「誰に」「何を」「どのように」提供

するか (サ・なぜ、IIFが取り組まれているか

3. 関連ソフト・IIFは、何をもたらすのか

・NDLに関係あるのか

館内認知↑

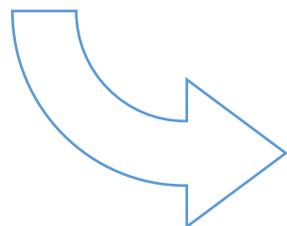
なぜ各国研究図書館がIIFに取り組んでいるか。

1. サイロ問題、開発の重複、利用者の不便の解消

英国内の21のプロジェクトを
対象にしたログ調査

→ 3分の1は一度もアクセスがない。

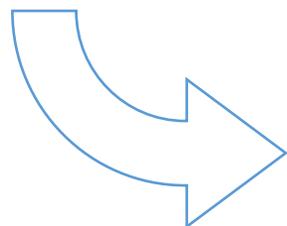
2. デジタル化画像の研究利用促進



公費支出の説明責任、学部戦略、リポジトリの存続・・・

人文学研究者のニーズへの対応

3. 国際共同研究における成果志向



先行研究、蔵書に関する既知事項、
過去の目録等の事前共有

情報行動研究

人文科学系研究者の特徴 (STEM分野との比較)

情報発見： キーワード検索 < 脚注、参考文献

資料種別： 電子ジャーナルが主 < あらゆる資料タイプ

資料年代： 最近5年以内が主 < 古いものでも有用なものがある

電子化仕様： 読めればいい < 電子化仕様知りたい、原本情報知りたい、
誰がどのような方針で電子化したか知りたい

費用： いいツールは買う < できれば無料で

テキストデータの機械解析等を行ってきたデジタル人文学系研究者からは、これまでの成果を画像にリンクさせたいというニーズ。

「アノテーション（注釈）が、学術コミュニケーションの単位だ」

<https://hypothes.is/annotating-all-knowledge/>

例えば...

ライデン大学図書館

2000年～ 人文学部と共同設置のスカリヘル研究所主導で貴重資料の研究促進

2003年～ 教員と専門司書との共同研究・教育プロジェクト開始

2008年～ 「情報計画」に依る専門司書をプロジェクトマネジャーとする資料群ごとのデジタル化開始、資料群レベルから個別資料レベルへ段階的情報公開拡大

2011年～ ボードリアン、BL、プリンストン大、バチカン図書館との連携強化

2016年～ IIF-C に参加



IIIFは何をもたらすのか。

1) 資料流通の<正の循環>と<負の循環>

正の循環：画像やそのメタデータが入手しやすい資料、関連情報が豊富に得られる資料ほど、研究資源としてより多く、より深く、活用されるようになり、さらに多くの関連情報、より優れた研究成果が生まれる。

負の循環：その逆。

2) 研究成果の共有・発表媒体や粒度の多様化

NDLに関係あるのか。

たぶん、「ある」。

- 1) 当館資料を<正の循環>の中に入れていく方が、明らかに望ましい。
- 2) 研究成果の共有・発表形態の変化は注視する必要がある。



リポジトリ（コンテンツの管理・公開機関）

70年分の蓄積を、より入手しやすく、
使いやすく

画像・メタデータ

構造化されていない資料に関する知識

電子化されていない資料に関する知識

文書化されていない資料に関する知識

より豊かな情報資源へ
みなさんと共に。

今年もデジタルライブラリー
カフェやります！